


2019 年度 研究サマリー

研究会名称	東名古屋泌尿器疾患研究会	
代表者所属	藤田医科大学 腎泌尿器外科	
代表者氏名	星長清隆	
研究方法・結果	<p>ロボット支援腎部分切除術 (RAPN) は腎癌に対して 2016 年 4 月以降保険収載され、症例数が増加している。当院では 2010 年本邦で初めて RAPN を開始し、症例数は 150 例に及んでいる。腎部分切除術では周術期に達成すべき”Trifecta”と称される目標として、切除断端陰性、温阻血時間 25 分未満、術後合併症なしが挙げられ、特に温阻血時間 25 分未満を行うことにより、患側腎の腎機能低下を防ぐことが出来る。当院における治療成績を後方視的に検討するとともに、術後の腎機能に及ぼす影響について新規バイオマーカー(NGAL L-FABP)について検討した。</p> <p>温阻血時間 25 分未満の達成率は 87.4%であった。温阻血時間と腫瘍サイズに関しては負の相関が認められた。一方臨床的に血清 Cr との相関関係は認められなかった。</p> <p>尿中 NGAL と臨床パラメーターの比較検討を行ったところ、患側尿と温阻血時間について阻血解除後 1 時間で相関を認めた。さらに術後 1 か月の eGFR の変化率と阻血解除後 12 時間で相関を認めた。</p> <p>上記から新規バイオマーカーとして患側の尿 NGAL は RAPN における腎機能障害の指標として有用であると考えられた。</p>	
研究成果 (論文、学会発表、雑誌掲載等)	<p>・ Predictors for trifecta achievement of robot-assisted partial nephrectomy in high-complexity tumors (Preoperative Aspects and Dimensions Used for an Anatomical score ≥ 10). / Takahara K, Sumitomo M, Fukaya K, Jyoudai T, Nishino M, Hikichi M, Nukaya T, Zennami K, Ichino M, Fukami N, Sasaki H, Kusaka M, Shiroki R. /Asian Journal of Endoscopic Surgery/2019.10/Epub ahead of print</p>	